

看護学における Translational Research

振動による褥瘡の治癒促進をめざした 機器開発・検証のプロセス

看護学の研究成果は社会をどのように変えてきたであろうか。20年前、30年前と比べて、臨床をどのようによくしてきたであろうか。研究を論文として公表することが研究者としての重要な使命であるが、その成果を社会に還元することがどれほど難しいかを研究者は理解している。そのような苦悩が、1つの研究枠組みで解消されつつある。それが Translational Research である。もともとは創薬の分野で使われはじめた言葉であるが、広い意味で、「基礎研究の成果を臨床へ役立てるための翻訳的な研究過程」と捉えている。「基礎固め」を確実にしない、そこから生み出される、一般社会には理解が難しい言語で構成された新しい技術や知識を、実社会で役立たせるための翻訳作業が看護学の領域にも流入してきている。

この企画で強調したいことは2点ある。日本の看護学の研究には、疫学的アプローチを用いた観察研究によるニーズの把握や、質的研究方法を用いた現象の言語化が多いが、メカニズムを解明する基礎研究や技術の臨床評価研究は非常に少ない。つまり、Translational Research の手法は、現象の把握にとどまることなく、新しい技術の開発と臨床評価までの研究プロセスとして、看護学の領域に必要欠くべからざるものである。日本のすばらしい看護技術を社会に発信するにはこの手法が最も効果的であり、次世代育成の土壌ともなる。

もう1点は、Translational Research のプロセスを完遂するために、1つひとつのステップを論文として公表することである。臨床におけるニーズの把握、シーズの発掘とそのメカニズムの追求、技術の開発とその臨床評価といった、そのステップの技術、知識を明文化して、広く社会に批判を仰ぐことが以

前にも増して重要になっているのである。わが国では、少なくとも年間に2000人以上の看護学の修士課程、博士課程の学生が学位論文を書く。しかし、確かに学会発表は多いが、論文数は極めて少ない。Translational Researchの最終ゴールは臨床への新技術の導入であり、そのための論文発表は必要不可欠なのである。グローバル化が進み、もはや技術や知識の多くは全世界が同時に共有できる時代となっている今日では、英語での論文発表を行なうことにより、日本の看護学を世界に知らしめ、世界の看護学を牽引する気概をもって研究に取り組む若手研究者が育つであろう。

Translational Researchの枠組みは、日本の看護学において、新たなあり方を提示する大きな福音となった。短大の助手になった30年前を思うと、日本の看護学は確かに進歩した。しかし、残念なことに医療技術、薬剤開発のそれには及んでおらず、患者のQOLの向上に直結するであろう看護学の飛躍が大きく期待されている。

本焦点を通して、振動機器の開発というTranslational Researchの例を提示することで、私たちの研究室が何をめざし、そしてどのような情熱をもって新たな技術を生み出しているのかを感じてもらい、次世代を築く足掛かりとしていただければ存外の喜びである。

(企画：真田弘美 東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻
老年看護学／創傷看護学分野教授)